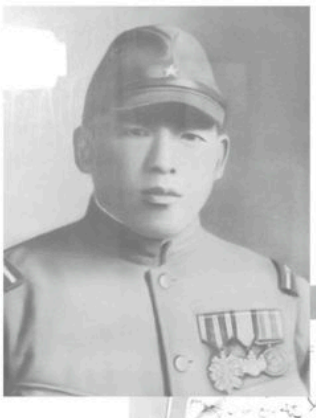
特集

戦後70年の記憶

アメリカから戻ってきた日章旗秘話

終戦から70年の夏がやってきました。その記憶を辿ることができる人々も少なくなる中、戦死した兄の遺品が70年もの時を超えて、アメリカから返還されるという出来事がありました。



硫黄島で戦死した村野多吉さん

70年余を経て戻ってきた日章旗。一部にシミがあるけれど、寄せ書きされた名前がはっきりと残っている。

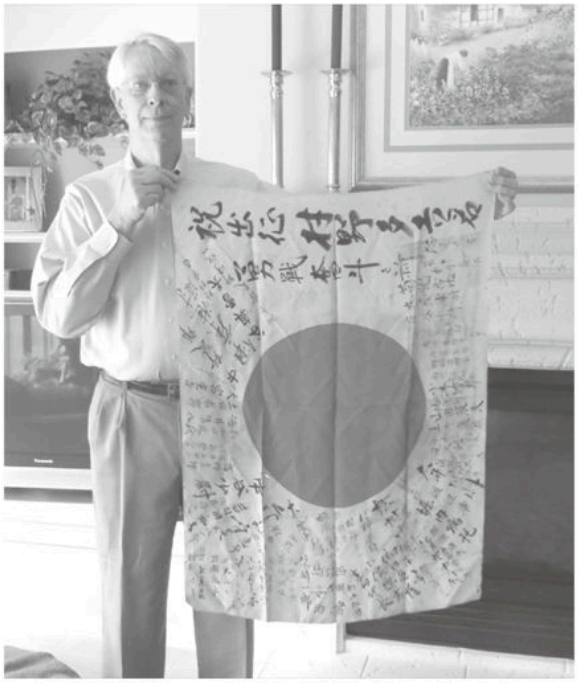
東久留米市柳窪、武蔵野の面影残す一帯にある村野辰雄さん（87歳）のお宅を訪ねました。辰雄さんのもとに兄、多吉さんが持っていた日章旗がアメリカから戻ってきたのは今年2月のこと。アメリカテキサス州在住のM・バートン・ベーカーさんからヒューストンの日本領事館、厚生労働省などを通して返還されたものです。

日章旗は縦0・7メートル、横1メートルの大きさ。「祝出征　村野多吉君」「勇戦奮闘を祈る」の文字を先頭に、日の丸の周りに約70人もの名前がびっしりと寄せ書きされています。陸軍の伍長だった多吉さんが2度目の出生の際、家族が贈ったもので、親戚や近所の人びと、同じ兵役所で働いていた同僚の人たちが署名したもの。

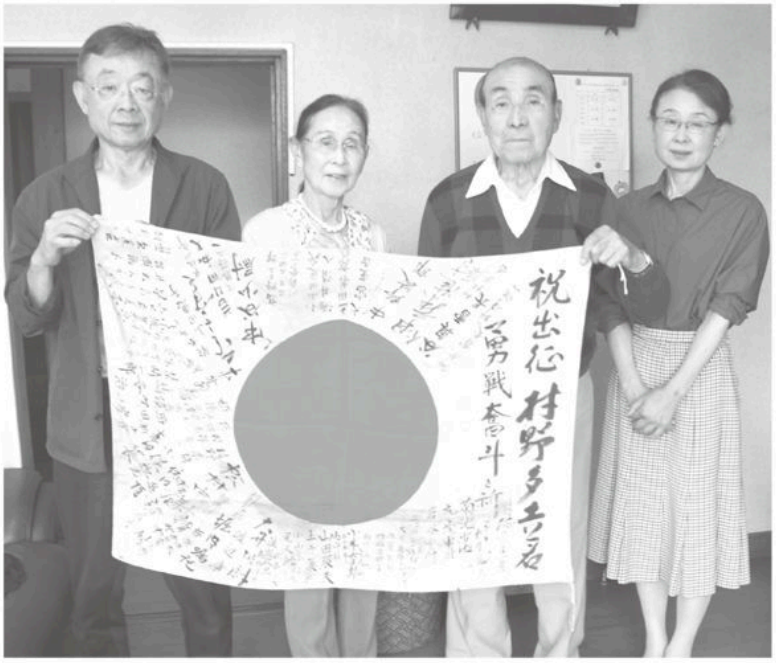
「これは村の名士だった人だ、これは親戚、自分の名前もある」と辰雄さんが当時を懐かしむように話します。旗の周りには妻の八重子さん、長男で同居している昇一さん、近くに住む長女の青山京子さん。よく見ると多吉さんの母親、せきさんの名前が端っこに控えめに書かれているのが印象的。母親としての心情が推し量られるようです。この日章旗をお守りのように体に巻き付け、多吉さんは戦地へ向かったのです。

硫黄島で戦死した兄

多吉さんは7人きょうだいの長男で、村野家5代目の跡取り息子でした。兼業農家で狭山茶の仲買商として、早くから車を持ち、多吉さんは運転手をしていたといいます。辰雄さんは兄の11歳下。戦時中は10代でしたが、多吉さんの出征当時のこと



テキサス州ヒューストンに住むM・バートン・ベーカーさん　返還する前の旗を持って。



多吉さんの形見となった日章旗を持つ（左から）昇一さん、八重子さん、辰雄さん、青山京子さん（東久留米市の村野さん宅にて）。

をよく覚えているそうです。

「最初の出征の時は柳窪から東久留米の駅まで、みんなで歩いて行って見送りましたよ。帰ってきて兵役所に勤めていて、2度目の召集の時はこの戦地へ行くのかも分からず、ひっそりと見送りました。兄がいない間、昭和19年3月に母親が脳梗塞で亡くなり、知らせるかどうかで毎日のように家族会議を開いたものです。悲しむだろうからと結局教えなかったのですが…」

しかし、母の死からちょうど1年後、多吉さんは硫黄島で戦死していたことが戦後になって分かりました。28歳で帰らぬ人になったのです。小笠原諸島にある硫黄島は太平洋戦争有数の激戦地。日本軍戦死者2万129名、アメリカ軍も6821名の戦死者を出しました。硫黄島には河川がなく、雨水を貯めて飲料水にしなければならない環境。渇きと飢えとで日本軍にとっては過酷極まる戦場でした。

遺骨が戻ってくることはありませんでしたが、近くにある村野家の墓に参る時は「水をいっぱい飲ませてあげたくて、いつも墓にたっぷり水をかけるようにしている」と辰雄さん。都の墓参団に参加して、硫黄島を訪れたこともあるそうです。「どういわれたって、戦争はない方がいい」辰雄さんがポツリともらした言葉が胸にズシリと響きます。

日米の家族をつないだ日章旗

多吉さんの遺品が一切ない中、突然、「旗を遺族に返還する」という知らせに、「そういう話はニュースなどで聞いたことはありましたが、まさかうちに戻ってくるとは。奇跡のような出来事でしたね」と昇一さん。70年の年月を経て帰還した旗は、多吉さんの苦闘が偲ばれるような薄茶色になっているものの、大切に保管されていたためか、破損もなく、生地もしっかりとしています。

多吉さんが肌身離さず持っていたはずの旗は、弟妹だけではなく、親戚、友人にも驚きと感動を与え、亡き人の思い出を語る貴重な遺品となりました。それと同時に、返還してくれたベーカーさんへの感謝の気持ちにつながっていきました。辰雄さんはじめ昇一さん、京子さんは丁重な礼状をしたため、取材を受けた新聞記事とともにベーカーさんへ送ったところ、ベーカーさん自身もうれしい気持ちを返信しました。以来、村野家の人びととベーカーさんとのEメールでの交流が続いています。

ベーカーさんが旗を返す前に、撮ったという写真を村野さんが見せてくださったので、掲載させてほしいと了解をとってもらった。その際、本誌からEメールでベーカーさんへ今回の体験について尋ねました。するとA4用紙2枚に及ぶ長文の返信をいただきびっくり。それによると、ベーカーさん側の経過は次のようなものでした。

「日章旗はもともと20年前に亡くなった父親が持っていたもの。だが父は太平洋戦争に参戦した人ではなく、おそらく友人から記念として譲り受けたものと思われる。少し前に息子に旗を見せた時、インターネットで調べてみてはどうかと言われた。すると、それが出征時に家族や友人たちから贈られた『祈りの旗』であることがわかった。家族にとって、どんなに大切な旗であったか、思いもしないことだった。これは自分の所に置いておくべきではなく、日本の家族のもとに返さなくてはならないものだと強く思った」

そして、ベーカーさんはヒューストンの日本領事館へ問合わせ、ほどなく持ち主が探し出されました。遺族の気持ちに考慮して、ベーカーさんは旗とともに自分の手紙も同封したそうです。

「返還後、その旗がもたらした村野家の人びとの喜びや多吉さんの思い出はまた、自分たちの家族にも深い感動を与えた。その後もお互いの家族の写真を共有し、戦時中の村野さんの家族写真も送っていただいた。

この5月に起きたヒューストンの洪水で、被害はなかったかと心配してくださりうれしかった。インターネットのお蔭で、遠く離れた2つの家族でも近くに感じることができる。太平洋戦争は2国間に不幸な時代をもたらしたけれど、これを乗り越え、長く親密な関係が続いていくことを願っている」

さらにメールは続きます。「いつかは日本を訪れ、日本をもっと理解し、新しい友、村野家の人々に会いたい」今回の特別な出来事への感動が読むものに伝わってくるベーカーさんのメールには、誠実そうな人柄がにじみでているようでした。

「実際に会ってお礼がいいたい」村野家の人びとにとっても、ベーカーさんと同じ気持ちです。70年前の日章旗にまつわるドラマは返還という形でジ・エンドとはなりませんでした。日米2つの家族に改めて戦争について考えさせ、平和の尊さを認識する機会を与えました。多吉さんが遺した旗は日米の家族をずっとつないでいくでしょう。これからも続く心温まるドラマが楽しみです。

S20 8／6から70年

原爆体験を本にして伝える

『ゆきちゃんが見たピカドン』

森本マリア／著
ナンシー・H・ロス／翻訳
綾瀬ひよ子／切り絵
発行／吉備人出版
（086-235-3456）
定価　1500円＋税

作者は広島市に住む新谷幸枝（ペンネーム・森本マリア）さん。東久留米市在住の娘さんが挿絵を切り絵で表現し、今年5月に自費出版。新谷さんは11歳の時、爆心地から15ｋｍ離れた自宅で原爆投下の瞬間を見ていた。それは「天地がひっくり返るほどの衝撃」。その後、自身が体験した周囲の混乱、悲惨さをゆきちゃんの目を通して、真っ直ぐに生々しく語る。、英文対訳つきで、原爆資料館にも置かれている。

このお話は同時に10mの長さの布に、新谷さんが蛍光色塗料で絵を描き、ブラックライトの布絵芝居として、小学校や児童館などで上演。「実体験を通した命の大切さ」を伝え続けている。次回作も娘さんとのコラボで出版予定。「この出来事を埋もれさせたくない。本にして遺したい」と強い気持ちを話してくれた。この機会に親子でぜひ読んでほしい1冊。

小平市非核平和都市宣言10周年

広島の被爆樹木2世の植樹式

7月14日、小平市役所正面ロータリー北側に、原爆で被爆し焼け焦げた幹から再び芽を出した、広島のアオギリ2世の苗木が植樹された。式典には広島市の松井一実市長も参加し、小林小平市長とともにあいさつ。核兵器廃絶、世界恒久平和の実現という広島の思いを広め伝えていきたい。アオギリが小平市民に平和のシンボルとして大切に育てられ、広島との懸け橋になるよう、それぞれ願いが述べられた。

案内板

植樹に先立ち案内板の除幕、最後には鳩のエコ風船が夏空に放たれた。